

小諸市長期学校改築計画検討会

中間報告会

平成29年9月29日（金） 19：00～20：30

市民交流センター ステラホール

主催：小諸市長期学校改築計画検討会

小諸市長期学校改築計画検討会 中間報告会 次第

1. 開会
2. あいさつ
3. 検討状況の報告
4. 市民の皆様との意見交換
5. 閉会

1

長期学校改築計画検討会 について

長期学校改築計画検討会

- 平成28年10月5日の市民学習会を受け、
計画の「たたき台」を検討するため設置
- 平成29年1月から、毎月1回会議を開催
- 平成30年1月に、教育委員会に「たたき台」
を提言

長期学校改築計画検討会

検討会委員 17名

- ・ 渡辺 史郎（座長、元小諸高等学校長他）
- ・ 井出 忠臣（副座長、信州大学特任教授）
- ・ 田中 雄樹（東小学校PTA代表）
- ・ 大塚 禎三（坂の上小学校PTA代表）
- ・ 尾芦 拓未（野岸小学校PTA代表）
- ・ 小林 千種（水明小学校PTA代表）
- ・ 笹沢 文男（千曲小学校PTA代表）
- ・ 山口 傑（美南ガ丘小学校PTA代表）

長期学校改築計画検討会

- ・ 福田 優 (小諸東中学校PTA代表)
- ・ 市川富士夫 (芦原中学校PTA代表)
- ・ 小林佳菜恵 (幼稚園・保育園保護者代表)
- ・ 前田 富孝 (区長会代表 ～平成29年3月)
- ・ 山浦 和茂 (区長会代表 平成29年4月～)
- ・ 新井 良男 (公募)
- ・ 大池 実佳 (公募)
- ・ 富岡 淳 (公募)
- ・ 小林 昭寛 (小学校校長代表)
- ・ 黒沢 敏範 (中学校校長代表)

検討会が提言する事項

○少子化の進展に対応した小中学校の
あり方

○小中学校の規模

○小中学校の配置および校区

に関する事項

検討会の経過

- 第1回 (H29. 1) 座長・副座長選出、学校基礎データの確認
- 第2回 (H29. 2) 委員一人ひとりの学校改築への想い、
教育の動向、学校の変容の状況
- 第3回 (H29. 3) 大きい学校、小さい学校の良い点、心配な点
- 第4回 (H29. 4) 望ましい学校規模について
- 第5回 (H29. 5) 小中一貫教育について
- 第6回 (H29. 6) 佐久穂町立佐久穂小・中学校の取組に学ぶ
- 視 察 (H29. 7) 信濃町立信濃小中学校の取組に学ぶ
- 第7回 (H29. 7) 小中一貫教育の導入について
- 第8回 (H29. 8) 中間報告会に向けた協議



2

少子化の進展に対応した 小中学校のあり方

小諸市の学校を取り巻く現状と課題

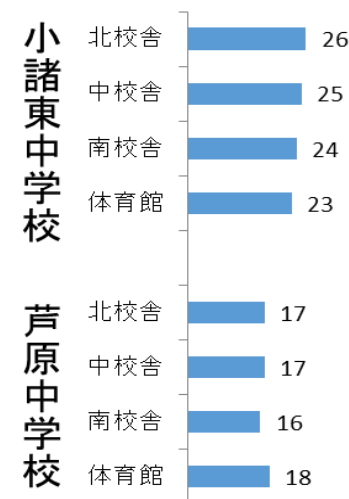
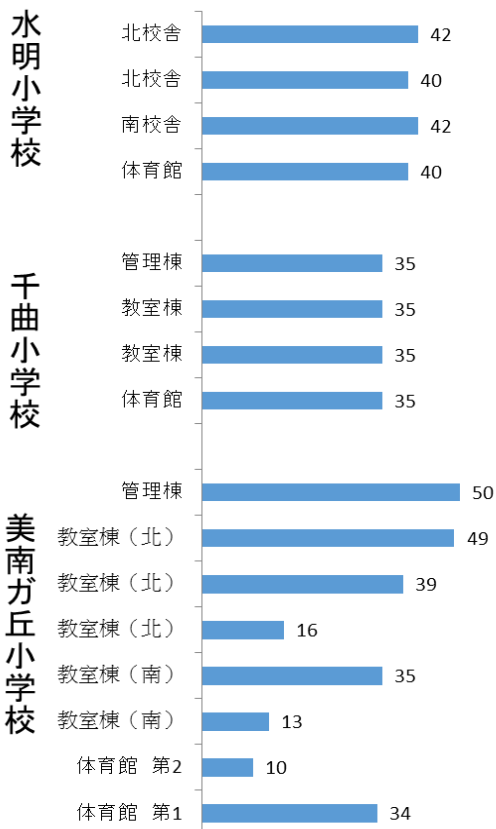
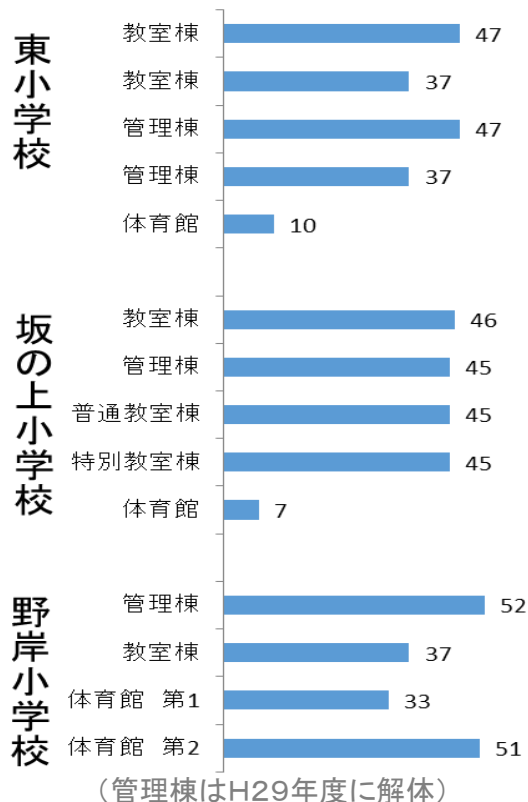
○児童生徒数の減少

(未来数値についてはH29市教委が独自に算出)

学校名	1982年	2017年	2022年	2027年	2037年	2017年と 2037年の 比較
	35年前	基準年	5年後	10年後	20年後	
東小	622	434	425	390	360	82. 9%
坂の上小	738	335	271	251	232	69. 2%
野岸小	830	318	276	250	231	72. 6%
水明小	729	366	293	271	249	68. 0%
千曲小	230	100	97	89	82	82. 0%
美南ガ丘小	876	668	600	560	516	77. 2%
小諸東中	1028	686	683	648	630	91. 8%
芦中	831	415	432	330	298	71. 8%

○施設の老朽化

小学校のほとんどが
築40～50年の建物



平成28年度末時点の経過年数

(単位:年)

仮に今の児童数の規模で改築すると、**6小学校で101億円!**

※試算額＝建築費＋解体費＋設計監理 (仮設校舎費用、外構工事費、備品購入費等は含まない)

○財源と生産年齢人口の減少

・市の自主財源

2014年度 88億4500万円



2024年度 61億7800万円(約30%減)

・生産年齢人口(15歳～64歳)

2002年	2017年	2040年
約29,000人	約25,000人	約16,000人
(15年前)	(現在)	(23年後)
0歳	15歳(中学3年生)	38歳

学校教育の変化

○大学入試改革（2020年）

➡ 学力の転換・指導法の転換

○コミュニティ・スクール、小中学校の一体化

➡ 学校運営の転換

○新たな教育内容 ➡ 道徳の教科化、英語教育、
キャリア教育、プログラミング教育

○子どもの多様化 ➡ 子どもたちの多様な教育的
ニーズに応えるきめ細かな対応

コミュニティ・スクール…保護者や地域が学校の様々な課題解決に参画し、それぞれの立場で主体的に子どもの成長を支えていくための仕組み。

キャリア教育…社会人・職業人として自立するために必要な能力や態度、意欲を形成・向上させるための教育。

教育の方向は

- 子どもに体験させ、考えさせ、判断させ、行動させる仕組みをつくる。
- 時間と人手をかけて、子どもが学ぶ場を学校も市民も共につくる。
- 学年を越え、校種を越え指導をつなげていく取り組みを進める。

小中学校のあり方

未来に生きる小諸市の子どもたちのために



学校教育の変化や多様な子どもの教育的ニーズに対応できる学習環境を整える。（施設、人、物、仕組み）

学校改築の視点

地域防災や地域・卒業生の思いを考慮しながらも



小諸市で育つ子どもたちにとって
「より望ましい学校の姿」はどうあるべきか
という視点にたって議論する。



望ましい小学校の規模

大きい学校・小さい学校の 良いと思うところ、心配になるところ

規模	良いと思うところ	心配になるところ
大きい	○クラス替えがあり、多くの個性と接することができる。 ○大勢で学校行事ができ、にぎやかで活気が感じられる。	○学校全体で先生の目が届きにくくなる。 ○一人の子どもが施設を使える分が少なくなる。
小さい	○学校全体で個々の子どもに目が届きやすい。 ○行事等で個々の子どもが活躍する場が多くなる。	○人間関係が固定化してしまう場合がある。 ○教員数が少なく、一人の負担が大きくなる。

望ましい学校の姿

- クラス替えができ、多くの個性に接することができる。
- のびのびと自分を表現でき、子ども同士の学びがある。
- 教育の変化に対応した十分な教員の確保と質の高い指導が望める。
- 施設設備が整い、安心して勉強できる環境。
- 安全に通学することができる。
- 活気ある学校行事ができる。
- 個々の子どもに目が届き、様々な子どもの教育的ニーズに対応できる。

望ましい学校の規模

前頁の条件を実現する小学校の規模

1 クラス… 20～30人前後

1 学年 … 2～3クラス程度

※学級編成の基準：1学年2クラス以上では、
1クラス最低で18人が必要、最高は35人

児童数の推計

新1年生の人数

学校名	2017		2018		2019		2020		2021		2022		2023	
	人数	学級数	人数	学級数	人数	学級数	人数	学級数	人数	学級数	人数	学級数	人数	学級数
東小	77	3	65	2	63	2	76	3	78	3	66	2	59	2
	(25人×3学級)		(32人×2学級)		(31人×2学級)		(25人×3学級)		(26人×3学級)		(33人×2学級)		(29人×2学級)	
坂の上小	51	2	61	2	45	2	41	2	30	1	43	2	41	2
	(25人×2学級)		(30人×2学級)		(22人×2学級)		(20人×2学級)				(21人×2学級)		(20人×2学級)	
野岸小	53	2	40	2	47	2	41	2	56	2	39	2	44	2
	(26人×2学級)		(20人×2学級)		(23人×2学級)		(20人×2学級)		(28人×2学級)		(19人×2学級)		(22人×2学級)	
水明小	59	2	58	2	56	2	42	2	43	2	35	1	43	2
	(29人×2学級)		(29人×2学級)		(28人×2学級)		(21人×2学級)		(21人×2学級)				(21人×2学級)	
千曲小	16	1	13	1	14	1	26	1	11	1	17	1	11	1
美南ガ丘小	103	3	93	3	106	4	112	4	90	3	96	3	83	3
	(34人×3学級)		(31人×3学級)		(26人×4学級)		(28人×4学級)		(30人×3学級)		(32人×3学級)		(27人×3学級)	
合計	359	14	330	12	331	13	338	14	308	12	296	11	281	12

* 1学級35人で計算

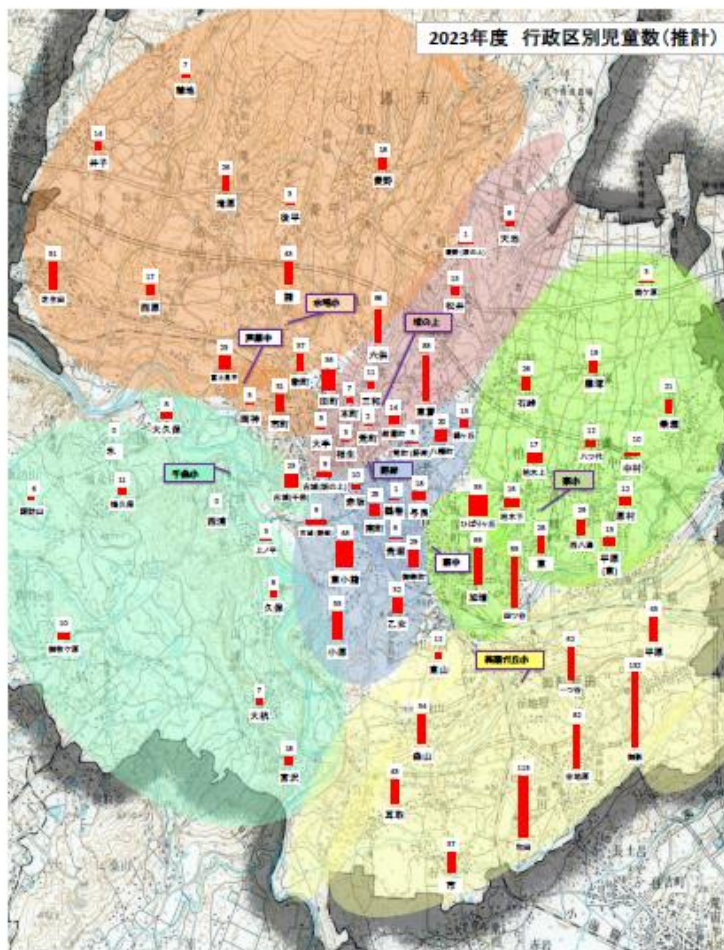
* 平成29年8月31日時点の社会増減を考慮しない（現住所からその通学区の学校に通うと仮定した）新1年生の推計値。

* 特別支援学級に入級する児童数を考慮すると1学級あたりの児童数はさらに減となる。

予想される学級編成の状況

- ・坂の上小、野岸小、水明小は特別支援学級に入級する児童を除くと、1クラス20名未満となる可能性がある。
- ・2021年 坂の上小、2022年 水明小の新入生が1学級となる。

行政区別児童数（2023年度推計値）



別紙をご覧ください。

検討会委員の意見

- ・ 入学者減をみると 6 校の存続は不可能ではないか。
- ・ 児童生徒数の推移を踏まえた通学区の見直しも検討したい。
- ・ 校舎を改修しながら、複式学級が発生する際に統廃合を考えてはどうか。
- ・ 学校は、子どもにとって学習環境や設備などがより充実した場所であって欲しいため再編を考えたい。

小諸市の子どもたちにとって
「望ましい学校の姿」の実現のため

市内小学校は

再編が必要な状況

検討すべき事項

「望ましい学校規模」を既に下回る、近い将来下回ることになる学校の再編については、様々な検討が必要。

○統廃合

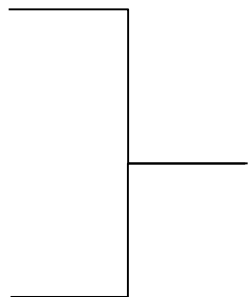
(今後、議論を進める)

○通学区の見直し

(全体が減る中では効果が少ない)

小中一貫教育

(慎重に検討研究)





4 小中一貫教育について

小中一貫教育とは

- 小中の教員が目指す子ども像を共有
- 9年間を通じた教育課程を編成
- 系統的な教育を目指す

◆義務教育学校

- ・ 一人の校長
- ・ 一つの教員組織

例：信濃小中学校

◆併設型小学校・中学校

- ・ 学校ごとに校長
- ・ 学校ごとに教員組織

例：佐久穂小中学校

信濃小中学校と佐久穂小・中学校の状況①

信濃小中学校

○平成16年4月 少子化、学校施設の老朽化に対応し、同時に教育の質の向上を図るため「信濃町立小学校適正配置検討委員会」を設置



○平成24年4月 開校

佐久穂小・中学校

○平成19年2月 子どもの数の減少を背景に「保育所・小中学校在り方検討委員会」を設置



○平成27年4月 開校

両校とも委員会設置から9年目に開校

信濃小中学校と佐久穂小・中学校の状況②

信濃小中学校

児童356名 生徒209名

初等部 1年～4年

高等部 5年～9年

ふるさと学習、読書活動、
特別支援教育を柱とする。

(個々の教育的ニーズに対応)

佐久穂小・中学校

児童514名 生徒261名

基礎充実期 1年～4年

活用期 5年～7年

発展期 8年～9年

独自英語カリキュラム、ふるさと学習からキャリア教育まで系統的に学ぶ。

成果と課題

- 成果
- 不登校生徒の減少等、中1ギャップ緩和
 - 地域とつながる学習が充実
 - 学年を越えた子どものつながり
 - 統合することで町費職員の集中配置ができ、集団不適応や学習につまづく子どもを支援

- 課題
- 学力向上の成果は明確には現れていない。
 - 人間関係がこじれると継続する場合がある。
 - 系統的な指導、調整のための会議が増える。
 - 規模が大きくなると一体的な学校運営が難しい。

中1ギャップ・・・中学校に入学した子どもが、小学校と異なる環境になじめず不登校やいじめが増加すること。

小中一貫教育について 検討会で出された意見

- ・信濃町、佐久穂町とは子どもの数も自治体の状況も違うので、そのまま導入することは難しい。
- ・導入するなら小諸市の形を考えることが必要。
- ・市内に一貫校と従来の小中が存在することになった場合、教育の公平性は保たれるか。
- ・保育園も老朽化している。併設も検討しては。
- ・校区を再編しコンパクトに整備する選択肢もある。
- ・理解されるには時間が掛かるのではないか。

小諸市への小中一貫教育の導入について

すぐに導入するとは言い難い。

小諸市はどのような形なら導入可能な
のか慎重に検討を進める。

本日の中間報告に対し
皆様のご意見を
お聞かせください。

本日はご参加いただき
ありがとうございました。

最終面のアンケートにご協力を
お願いします。

お気をつけてお帰りください。